

講演要旨

イスラーム世界との相互理解の進め方に関する一考察

東洋哲学研究所客員研究員
浅子 清

中東アラブ地域の国民の多くはイスラーム教を奉じるムスリム（イスラーム教徒）だ。歴史的に日本の同地域との関係は薄く、同地域の宗教、国民、風俗文化を知らないことが多い。「知らない」ことは多くの場合は、偏見、恐怖をもたらす。特に、斬首刑などの厳しい刑罰を有する国や、同地域国民の一部による数々のテロ事件への関わり、戦乱の多発などから、その国民を含めて「イスラームは怖い」との否定的印象を多くの日本人は有していることだろう。

講師は中東地域を専門とする外交官として、同地域と 40 年以上に亘り関わり、同地域の 5 か国（エジプト、クウェート、サウジアラビア、ヨルダン、バーレーン＜2 回＞）に駐在し、同地の多くの人たちと公私に亘り交流した。特にエジプトではアラビア語の研修のため 1977 年 8 月から 1 年間エジプト人家庭に下宿し、日常生活の中から、語学のみならず、彼らの宗教観、家族観、生き方を多く学んだ。

彼らは、仏教徒である講師自身と歴史、宗教、文化は異なるが、人生への思い、家族への思い、隣人・友人達との関係を大事にする、貧しいながらも毎日の生活をまじめに生きる、地域の平和を心から祈る、といった点で、我々日本人と何ら異なるものはなかった。特に家族の関係は日常的であり、結束が固かった。

では我々日本人は、これらイスラーム教世界（中東地域のみならず、東南アジア、西アジア、アフリカ大陸が含まれる）の人々とどのように交流、相互理解を深めて行けば良いのか？ 講師は、日常の生活の中でムスリムと交流すると共に、仕事面でも、日本外務省が始めた「イスラーム世界との文明間対話」事業に、本邦でも、在外でも関わった。

私は、これらの経験や業務で得た知見を基に、特に中東イスラーム世界の人々について、日本人とどこが同じで、どこが違うのか、について語りたい。またこれから日本や日本国民が、イスラーム世界の人々と交流しつつ、相互理解を如何に深めて行くべきかについて、お話ししたいと思う。また日本と言う国家にとって、イスラーム世界がこれからも如何に重要な存在であるかについても語りたい。

以上